

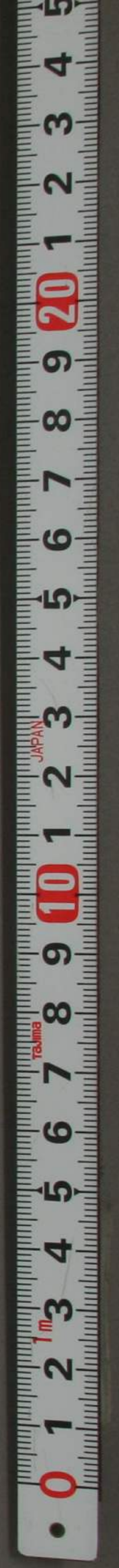


菊峯敬馬奇俠客傳

集壹集

五

13  
3157  
5



へ13  
3157  
5

常五  
開卷驚奇俠客傳第壹集卷之五

東都 曲亭主人編次

第九回 御士二公 癩病人の遇ふ

光棍初々 舊悪を懺悔を

再説著演の那銅笄を索難て從者と共侶小水橋を彼此且々徘徊  
する程高麗寺村の方より五六個の里人が一個の社杖を廻して這方と投て牽  
ひて東の邊に近づき隨ふとこれ這社杖の別人多きある橋の上へおしよせ介抱  
せし金二両を取せり癩病病であられ亦復疑訝りて吐裏小葉原來彼社杖を  
舊悪ありて囚れ然らば竊疾ありて緯の糸及ぼさるる間答と原程小部里人の  
その中相識するも一人あり原是藤澤小程遠くある里人某乙が獨子小正と  
るもの豆裏の他而親の長は病着小生活の便りも失ひ朝の煙も絶え折著演他の

常五  
大入  
全權  
本回

開卷驚奇俠客傳第壹集卷之五

九

米も取せ銭もきりや西三面艱苦を極むさぞとあり。さて両親世を去りてのりその里も住  
やこひん筆把る支の人をねれ或人の外せられて紅粉阪の柳巷ふ赴地地方の書役  
とつものいふやと年來を経ると登時小正の著演をて遠く走進つる腰を折れや  
めを檀那久くうち絶せりぬれはもあ健ふりなきと欲ひるは何ぞ今朝は何  
処とて早く出さるゝと向れて著演のれがと昨の梅澤の通家許許封ふ小夜  
深のれが弟の今朝未明も還る折あり常事のあり且徘徊する和主のり庵が  
里長の噂は傳へるが恙もなきと愛で。就て詢え一談ありその杜伎の何もの故の纏  
められて牽きやん聊少くもあれ情由具のしや。这里を尋ね止し駐まれば心づかぬ所  
ゆふ似れと崖略と示れぬか。とられて小正後方をさう向せぬ彼囚徒の目四郎と喚  
做した宿所不定の破落戸人のめらる庵花柳の姿鏡屋の紅毫と遊女も別離て  
幾夜とてさかみ程の餘りさう遊女の價の十四五金及び債りのも皆の宿

所々々々の里とありの搦鬼と。うらや。主人の堰で紅毫小絶てあせさるる  
了。昨夜那奴を推て来た遊女の古借を取せん快紅毫を出せといふは金  
遣とぬと催促せられ絶の圓金二面を取ん妓有の投與へ左右も受を推戻して  
餘せられ金も裏の十四五面であらぬと。さすの十か一も足らぬといふは遊女  
ゆひねとのるも果は声あ立て古借の聖のかへ未取せん且その金を受收め快紅毫も逢  
せんといふ妓有のりこ聴く。云々と論ゆる目四郎大に罵狂いで矢庭の妓有と  
搦倒し障子隔亮と蹴破ると鄰坐席の木置盤さふ踏推し擲ちる狼藉のべうも  
あつたれ人許きて前後より組禁め縄を被て一夜さ成すと曉ら然れ昨夜は下  
あれりのみ不拗づらひで自睡のせは文書を定め切録倉の問注所へ牽りてまゐりて徳々々  
許まらんそ那姿鏡屋の人々ともつれとて黎明より此て這里も来るを辞せり  
其の著演のりや。原來彼目四郎と喚る杜伎の色もその身を持崩して

人々くろくより。俺が取せる金で、熟奴おらん。その福を譲せし。自業自得  
とのいふ。世末、徳の白物のあふ。亦怪む。足らざる。秋盜賊。密に。せらる。か  
憐れむ。あつ。遊女の。徳を。債を。漫。辨。惹。中。七。細。れ。七。訟。の。場。に。牽。る。か  
不便。俺。那。金。取。せ。ぬ。柳。巷。不。赴。と。も。ま。と。線。練。の。恥。あ。ま。糸。小。人。罪。す  
玉。抱。た。罪。あり。と。古。語。事。似。る。他。の。夜。の。狼。藉。と。及。び。あ。の。り。好。意。の。還。く  
仇。あ。り。と。知。る。悔。し。む。あ。り。と。一旦。極。り。る。人。あ。い。道。里。道。家。今。の。親  
親。と。釋。仁。と。不。仁。と。地。目。易。本。意。不。違。ん。薄。情。さ。又。只。その。の。さ。で。の。の  
送。せ。と。銅。算。と。迹。と。他。の。拾。金。這。義。も。回。生。け。る。今。番。極。木。如。と。尋  
思。と。あ。り。と。小。正。三。云。云。と。告。る。と。送。り。果。々。眉。根。と。擧。げ。嘆。息。と。た。忍。忍。圖  
心。も。大。胆。不。敵。の。白。物。之。徳。の。俺。さ。面。正。も。免。と。さ。る。他。の。妻。不。使。れ。針  
妻。の。獨。子。さ。り。父。の。既。世。と。去。り。あ。む。と。思。え。一。宿。所。の。召。と。且。使。試

たり。小妻。たり。初。状。軍。く。ね。折。々の。教。訓。の。身。の。為。と。思。さ。る。主。と。疎。と。親。も。知  
ら。と。送。り。遠。電。と。他。の。母。の。病。と。義。程。ゆ。き。身。ま。り。あ。い。後。他。の。近。擲。の  
在。り。と。噂。の。と。相。見。る。正。六。七。年。あ。り。環。の。あ。る。と。做。せ。更。ら。い。の。細。ら  
ま。と。訟。の。場。の。牽。る。縁。由。と。せ。有。敷。糸。不。便。他。の。あ。れ。の。親。の。末。期。あ。り。と。も  
あれ。極。り。人。の。さ。す。ま。欲。志。枉。俺。們。た。た。か。債。の。金。の。あ。り。後。日。俺。們。皆。へ  
この。議。只。皆。濁。り。の。さ。引。れ。る。事。の。あ。り。と。い。詠。は。慈。善。の。辞。を。擧。げ。と。り。い。ひ。お。け  
ぬ。小。正。三。の。顔。の。感。で。先。も。齊。一。停。立。る。衆。人。と。さ。る。と。各。位。の。あ。の。大。人。の。は。せ  
と。と。せ。れ。あ。り。と。這。方。さ。の。藤。澤。の。福。良。長。者。と。さ。る。俺。們。が。為。も。恩。人。也。の  
年。來。の。慈。善。善。根。飢。渴。不。通。り。彼。此。人。と。極。い。ひ。の。く。さ。り。は。一。善。の。あ。り  
觸。躰。と。哀。れ。と。そ。の。由。縁。の。金。と。引。ら。せ。極。い。と。さ。る。と。宣。は。這。義。と。兼。引。の。さ。り。と。さ

衆皆うち驚て且故馬を且欲以齊一進近つた。一箇々も名告せり然る方さる知  
らむと大く礼を仕りぬれどもとち賸話る事の中は安鏡屋の主人の又恭しく  
著演のうら對ひて既ふせぬがごとく昨夜這人の理不盡きりと捨かゝる生活の  
妨ふるに己正とせぬ録倉へ牽きてゆくとつらむと大人の亦而七由縁ありと示  
さるや和談の只這人の幸ひのふゆゆと亦俺們が扱ひ許されぬ解果るも難  
費の多く没るよある名高は大人まゝあらわれ後産産疼ま心安らる素より佳客  
まらねども月來の所給をよみぬれ債の金の後々まきゆあつちの掛ありと且  
本人と遊と一まらん郷縛の繩と解と繩より男をのどと答とあちちとつ  
組るも緩る程ふその餘のものも得て目四郎被る繩もそゆる解き解けり然  
程目四郎のさの小著演を取せる那金と紅高の會んと胸近の儀さぬれ  
更成らぬ物に遂に己がゆ小罵狂ひて細れ牽はるま来る程ふ又著演を撞見て

必しも抑留され昨夜の目四郎正二ヶ告る折の悔くも熱湯ふ古と焦せりへ猶  
且醋と嘆む心地し素より無頼の者者れども人と生れて本然の善なるありと  
まの恥と頭擡げの既ふと著演の慈善の心始終違ふ今その悪言をゆとよむと  
ふと露さを還て柳よりの誘へ又その裸體を極ひて呆るま不慙愧と且感且然  
のさふともくつる。登時著演が故意目四郎と睨て這白物奴が年長ても悪  
心と改めぬ終途を遭ふととらるる死奴をねども母のさふて這回極ひ  
さる胆意を納易て人さるる後竟可憎頭を喪れ心と甚だしくおそれ僅  
その意を悟り目四郎の稍頭を擡て家公允さる重々一洪因ととらるる身  
責て佐と慎まひん恨入てひとふゆゆと著演の又衆人うち對ひて和談の一條の  
甲斐ありと多くの金銀を治りて換ひし債とる前中も既ふゆとと那奴の債の金  
ゆもうち推ゆる不益盤も價と擡て贖ん置庵宿所訪れりその折金子と遊とと





包名作第一輯卷五

三十一世氏之丞

取送せし飲由く死所を果て刀をさるる銅筭をり抑件の銅筭八俺親の遺愛  
 他家の紋を附られし最惜との思ふも今朝の未明の立出て花水橋を徘徊し  
 傳汝の遭ひも這所以那折汝の迹を残りてる不在りければ俺が銅筭を拾ひて  
 ありそち拾ひてあつてと詭計とを竊とて任のそい憎も悪も飽きもれ今  
 何ぞ匿むる在下の君の仇のまゝの不測の罪を陥と謀りかともその人をさるる  
 言をばて高名虚しや大徳仁義の長者小恥を稍悪念と轉しその大匠と告  
 ぐやとあめめ今ゆるせん術も難義ありあれらの情由一朝の説果へくもあ  
 るふ這里より端近之乾浄れる所也意中と盡しきさん欲とよま著演領  
 介ら俺と共侶の這方へ来よと先立て庭を隔し離舎伴ひて坐とられ目  
 郎障子と引圖り衣領の間隠し那銅筭を取らる膝と找め声を低め

這銅筭を竊るも深き意味のさるるも次々なまら願の収めありとい  
 傳返を著演の徐小取とて故のさるる挿て却目四郎を正見といより甚  
 磨と訊其目四郎を嗟嘆七且俺より告まらるる思ふ言長  
 くも安ん在在原の假名川を客店肝八と喚れりの獨子ゆひの故の世の人  
 今に至る在下の客店の目四と喚れたる年十五六より比より這身の悪心精萌と  
 良く友を引入れ賭博を耽り遊女を惑ひて親の東西を喪ふと幾番の限りも  
 れ勘當をされて一稔あり賭鈔友人と親品を頼て其外富とて父の徳を恨み  
 母を賺て銭を借り衣も借りと皆賭博を失ひとも悪く言ふも竟然父の時  
 緊しく母を箠た後母の中垣を樹てつやく春着を日來の悪心増し  
 不如と尋思とて二親の外お守者稀折を張る門より潛り入る程の客居  
 逗留の旅人とかかき夫婦とを三人を會ひて何れも心



三もろく 竊聞せし。その比底倉を敷きたる。脇屋少将義隆の家臣也。他は子とそ  
 推考する。小六さの総角のまの義隆が子あり。よき。その時具小六の。徳而伴は病介  
 多。諄々と送言七。秋小包する短刀と巻軸を。而三種妻小示。七。死を小六殿  
 俱七。藤澤小赴け。那御小隠れ。野上吏著演。多少。一時義隆結。藤澤  
 異。兄弟多。と。左も右も。七。養れ。の。餘。の。息。の。声。細。七。苦。は。心。め  
 措。一。封。の。筒。と。取。り。取。り。妻。の。煩。り。ふ。ち。泣。て。口。説。を。言。哀。傷。悲。歎  
 竊。夢。隨。小。氣。の。滅。入。て。竊。心。も。且。入。耗。て。忙。然。り。折。外。裏。人。の。足。音。と。あ。る。末  
 ぬ。の。掩。親。へ。着。着。られ。と。息。を。東。西。も。ゆ。と。息。を。尽。小。鈍。も。逃。て。親。の。宿。小。還。り。し  
 本。意。を。言。那。旅。客。が。の。り。る。と。左。も。右。も。思。惟。の。巻。軸。の。脇。屋。の。系。圖。又。短。刀。の。菊  
 一。文字。と。名。け。り。る。重。宝。又。一。種。の。何。多。あ。り。けん。を。秋。小。掩。れ。て。息。を。け。れ。知。り。き。け  
 れ。巻。軸。と。短。刀。の。新。田。の。餘。類。の。證。据。那。落。人。們。を。鎌。倉。訴。稟。さ。る。も。濡。さ。る。

許。多。の。賞。錢。を。賜。ふ。と。あ。れ。れ。も。掩。親。の。宿。せ。只。今。訴。て。の。親。中。亦。落。人。を。由  
 措。は。る。出。示。と。受。入。然。て。外。聞。妙。を。且。藤。澤。遣。七。介。後。訴。き。後。一。と。尋。思。を  
 多。見。過。七。緯。の。便宜。を。現。以。小。那。病。人。の。館。大。英。直。と。喚。れ。の。を。幾。程。も。ね。く  
 多。ま。る。れ。い。妻。の。母。屋。と。を。ん。小。六。と。俱。小。極。を。大。人。の。憑。言。七。這。御。へ。來。け。は  
 緯。の。趣。又。英。直。の。極。を。遊。行。寺。と。て。丁。寧。に。兼。せ。や。め。一。為。体。の。送。り。多。く。さ。る。

此。の。時。小。六。の。母。と。多。心。と。親。品。の。告。て。竊。小。相。譚。ひ。小。親。品。を。從。和。主。の。も  
 多。志。倫。們。の。博。徒。も。人。の。俠。者。と。あ。る。と。這。身。の。栄。小。志。と。此。の。賞。錢。を。求。る。を  
 海。道。一。の。俠。者。多。野。上。の。翁。と。其。落。人。們。と。有。一。罪。多。害。る。世。の。豪。俠。の。味。

然。と。和。主。の。賞。錢。の。然。ゆ。訴。ん。と。お。ふ。禁。め。せ。な。け。る。親。計。を。除。く。親。計。を  
 見。の。好。ミ。離。れ。六。柳。以。西。親。姑。峯。と。東。七。飯。の。味。を。後。悔。と。寫。れ。て。その。後  
 以。單。り。た。這。親。品。の。室。町。を。猪。三。太。と。喚。れ。る。豪。傑。で。小。惜。小。一。年。來。強。飲。小

脾胃を破らば吐血を身まらしたる程に親肝八もあ次の年の夏五月時疫を犯す。病を癒ふ一旬もあらず。醫者も半分も信ひけり。只堂を返さず如く劇を演るる世を去り。その病中、小里人們の庵に親の勘當の賄話して這身を召かされ親の経営を生活米を嗣て主人よりこれを持崩せしむる。心改めねば僅に二椀の程の宅も庫も沽却して裏家住いの中にて母親も亦身まらりける。その初七日の藤原草撥集めども敷きつる。家材を送る。敗鐵經紀の借る。銭の月米の房銭の債は屋主を推苗れて勘當の合名字號の質屋に借屋の柱に置玉産残る。四十七文の假名川を立退りし。鎌倉金澤の天大磯小里原貌姑峰の湯本。這果半年那里の二月同氣同病相憐む。友より余生活もせ。閉鎖の浮世は直はと五六稔の程。憚りて今茲相摸る。底倉人自身を寓せて西月あまの程。身日閉鎖。利失ひく。債を贖ふ術なき。竊心の復起。考の進退を考。折る相摸の眼代。藤白隼人

正安同主の湯治の暇を賜りて底倉の浴室あり。まを之民の膏腴を叙りて富る。任せし酒宴遊興。米品をる。由遊する。の毛那里は潜入六宝の山獵造化も宜し。わんと計校する。準備する。夜に紛れて件の旅館に潜近る。垣と踰窓より入。正安主の臥房に赴き。却彼此と撥擗する。竊偷に熟き悲し。あまの度と喪いで傷臥す。壁をの足とあさる。踏る。忽地覺て吐嗟と叫び。声の放鳴。正安主偷兒入り。呼ぶ。て。岸破と起し引組なり。遮莫在下。小臂力あり。相摸も聊嗜む。左右を組も伏れを且く挑争。小程の駭覺。近習の侍紙燭を棄て。西三名。老次の間より走せ。来て主を援けて在下。と敷く。倒し。壓累を。矢庭。繩を。解け。後。成座。二名側を考。左右を程。夫の明。今。今。斬られ。後。生る。心地。後。悔の外。果。庭。命。俟。厨下。不。心。世。の。縁。今。身。摘。疼。痛。知。れ。浩。処。安。同。主。の。刀。引。提。坐。席。の。縁

頼み出で多々雑兵們の是も是て在下に又幸立て主の身邊に推居しを安同主熟  
 視て汝の原身は何果の毛姓名宿所... 稟せ快々も... 同れ在下  
 跪き下る在下の目四郎と喚れる一所不住の博徒... 續て造化の  
 彼中も此も... 債の苦いゆれて... 初て度起の夜棒... 孰も技を鏢  
 一文の... 忽地生拘られ後悔腑を噬む... 俺身を恨むの... 昔悪とて...  
 此の... 願いけれと叫言... 陳せ... 安同主領... 是の優... 汝が力  
 量武藝も... 昨夜れ... 知り領主の旅館... 憚りも... 潜ひ  
 入り大胆不敵... 胆鬼も見... 今も俺... 一箇の功... 立  
 んと... 命を助... 必重く用... 胸を定め... 下下悦...  
 何の... 今斬... 這首... 御恩... 非如水火の中...  
 と... 命的... 勉て功... 快々仰... 辨を放... 諾... 安

同主合... 雑兵們... 下知と... 繩を解し... 召登し... 飯を賜り  
 酒も飲... 更閑室... 召近づ... 密身... 俺... 怨敵... 此... 是  
 藤澤... 御士野上... 著演... 縁故... 箇様々... 那人... 二度迄... 牙... 為... 恥辱...  
 攬り... 癖の... 送... 説示... 相換... 今俺... 配下... 那奴... 由緒... 舊家  
 自由... 所... 故... 怨... 隠... 空... 光明... 過... 圖... 絆... 用... 賞... 禄...  
 望... 仕... 腹... 心... 家... 隷... 某... 們... 小... 事... 行... せ... 做... 損... 甚... 多... あり... 甚... 俺...  
 出... 宗... 免... れ... 故... 汝... 小... 女... 委... 任... せ... 故... 下... 沈... 吟... 仰... け... 仰... け... 仰... け...  
 と... 那... 著... 演... 武... 藝... の... 達... 人... ぞ... 何... 役... 類... 言... 多... 然... 下... 單... 身... 也... 本... 意... 遂... 遂...  
 亦... 甚... 麼... 妙... 計... 同... 下... 此... 擬... 議... 甚... 殿... 知... 甚... 著... 演... 養... 嗣... 七

ころとよひみ あつたねん。されとのころち  
 小六と呼做ま少年の裏不殿の討捕也。脇屋義隆の妻子在下故御在り一時  
 故あつたねんを知れり。その顛末の箇様々々。今より九ヶ月前假名川亭親肝公宿  
 中。英直の妻母屋は送言をす。緯の趣系圖の巻軸菊一文字の短刀のりまを  
 詳し耳は生口と比在下録倉訴す。と云ひか。猪三太ら。親品諫めを  
 黙止ら。まの義を以官領さ。更訴去るのる。著演親子の捕捕ら。縛首成  
 勿り。這義の。と真実を。密談數刻。及び。安同王愛ら。そ。大  
 なる。原野上著演奴。年来新甲荷擔。上を茂考野心。頭然。の毛を  
 告訴す。ん。罪な。疑ひ。雖然。拒障あり。俺身今録倉不在。は。速  
 告訴。一。是。拒障。前月湯治の願。より。五十日の暇。賜り。小。三。十日。あ。も  
 追。録倉。還。は。是。拒障。持氏。近。比。京。都。将。軍。と。御。不。和。み。  
 竊。立。の。御。宿。意。あり。新。田。村。の。餘。類。と。も。先。非。改。め。従。ひ。な。れ。思。免。の。

の。往々。これ。の。佳。今。汝。と。鎌。倉。遣。し。藤。澤。の。御。士。野。上。著。演。の。竊。脇。屋  
 義。隆。の。子。と。合。藏。て。養。嗣。し。て。具。訴。稟。を。も。平。死。證。据。の。あ。ら。は。し。疑  
 して。遲。滞。是。の。拒。障。と。釋。と。解。は。女。那。宅。小。潜。ひ。入。て。小。六。所  
 持。做。那。巻。軸。と。短。刀。と。奪。取。を。證。据。し。て。訴。す。著。演。親。子。の。立。地。小。掘  
 捕。ら。え。れ。ど。人。の。秘。書。室。刀。を。竊。取。す。と。心。を。盡。し。て。心。を。盡。し。て。心。を。盡。し。て。  
 亦。復。宜。く。手。段。を。著。演。が。前。も。或。は。刀。子。刀。并。れ。竊。取。す。緯。成。す。一。れ  
 將。他。が。所。藏。と。目。識。わ。る。妙。之。の。東。西。既。も。入。ら。ぬ。録。倉。の。て。ま。あ。る。却  
 訴。稟。を。野。上。史。著。演。の。年。來。逆。謀。の。企。あり。然。る。九。ヶ。前。之。脇。屋  
 義。隆。の。子。と。合。藏。て。小。六。と。名。ら。せ。て。養。嗣。す。某。初。の。義。を。知。り。近。曾。那。著  
 演。と。象。棋。の。席。小。會。せ。し。交。り。淡。く。多。り。佳。而。き。の。著。演。が。竊。す。其。を  
 招。て。譚。ひ。小。六。管。領。家。と。討。滅。し。義。隆。の。子。小。六。と。録。倉。の。主。せ。す。欲。和

殿の射藝銃鏡の達人を盗り去りて、管領家の外に出の折を現ひ  
 狙撃して素懐を遂さるるのみ。只一人のをも以て數百騎の將を撃つるの矢砲飛射の  
 優のり。這う箭前刀并の俺家の重宝を則和殿におまかせ。是れと管領家も  
 捕めと其れは件の武器を贈りて。否とあるその座を去らせし撃果を返す面影の勢筆で  
 見え。六陽虫一味の如く心で那里と考へては、伏し込進の爲に参上せりと、実事考へて  
 稟と竊取する箭前刀并の刃子刀并を、稗の證據とてとせし。時を移さず著  
 演が宿所へ討もせ向られて、那身のゆゑに、園宅の奴們一個も漏れ捕れ、必獄舎の  
 繫れん程、俺も亦鎌倉へ還りまわると詮議の席に列せし。その折著演寛枉  
 らんとせり。なる小陳考へとも、俺亦智略を旋らして、那奴小頭を喰せし。この隨小稟做  
 と。叛逆の罪を定め、竟る三族を夷け、宿怨其怨果先し。と愉快にすね  
 らせ、勿論は忠訴の功とて、上より賞錢を賜ふ。俺も亦錢帛を盡し、至其錢

取走。駝馬小荷の捷大役を念とて、支の做損を奴より。と其は示し、金十両を  
 出し。是は計議の雜費とて、紙小粘と既け、在下飲ひ受戴して、仰るる。必  
 做課せし。吉左右を俟せぬ。と言兼々、旅舎へ退き、且身皮を繕ひ、却平  
 塚を相識許、赴て逗留。夜も日も、這頭と徘徊と。大人の宿所を張る。既なる  
 一句、いふ人と欲せ、かゝる内外の用心堅固とて、音小便り、さうして、他行の折を  
 伺ひ、子連れ、刀并を竊んぬ。と機を易し。是より夜毎、暇あれば、聞鉢を既し  
 件の金と、纒玉夜を失ひ、然るに、昨日の朝も、あふ来り、大人の他行、さう  
 なく、小鯉を、花水橋の倒れ、俟し、豫の計校病者、さうと、齒を噛、締り、人地、さう  
 時不及、以て銅并を、口で開け、さうと、造化手通魔使、さうの折、さうと、銅并を、  
 竊ら。恣而癩癩、さうと、飢渴、這通と、身を投ん、欲せし。も、さうと、母、実考、さう  
 られ、長者の教訓、金二兩を賜り、一、噂、違ひ、慈悲、善根、天を考、さうと、以て、受て

別れてつと尋思し曾と定め難てあるゆへに又累只一つこの遭際也銅貨を  
 のと竊まるとを鎌倉のてめて安同主おれど。訴へ易論る野上の翁を仇  
 とも知らず憐愍深く這金と本錢せよと養え。恩不叛を猪三太おれど  
 友人が夥計と除くとひりせんとおれぬ鎌倉罪をせんとおれぬ藤白殿  
 のも一旦命を助けられ難費せよと十両の金と賜りたれば今も亦日か走らぬ  
 去のくせまゝと胸おのり高田ゆき尋思せし又究竟の段あり俺造化のより  
 時紅粉坂ある安鏡屋の紅室許屋のて。借る洞房銭多くあり這一両の金と  
 那里へおきて徳とつと必これ彼と論を古借と債られぬ折甚く罵狂に那里の奴  
 們己とつと必俺を細めて鎌倉赴きて害あを乞ひまらば徳も同往所の詮  
 議及ひて多所持する一両の金の出処と問れん時件の金の藤澤の野上若演着  
 是那若演の箇様々とあるに至て藤白殿おれどさる立立。誣て叛逆のよう哉

稟言不用意おつと似て野上の翁の思ふも放る藤白殿頼れる密謀立地お  
 成就然と然と安鏡屋の許の外おつと。搦て牽れ俺が細くもも釋るのさるで  
 逆徒を告訴の抽賞お東西許屋賜る。便是一事両全これ優る手段あり  
 とと深念の臍を固めよ。紅粉坂を赴きて形のごと計ひお出思ふ今朝も亦花水  
 橋の頭おつとゆき大人お撞見て必び恩義を受んと素より大人の仗氣お世の風声  
 也知るといふ飽きも仁義お富ひる至善の長者お御座せよ這身の小肖といわ  
 らう薄情や會車お相譚れて无実の罪お階さよ伎倆一祈りお悔いけれ今俺身  
 恨むも甲斐も切て大人お懺悔七左も右もあつと。思ひおれお阿容も俱せられ  
 ちまあり親お不孝他お不実の罪と放蕩を頼三十餘年の非と知るも只  
 是大人の高義大徳人の及ぶ誠心お感服せしおつと。徳れ大人お善知識を  
 お先にも恩義お報へ術も。今面前お身を殺つとつと。詭譎するぬ。知せまらぬ

允させぬとの果て速く身と起し柱を觸れ頭を碎たて死せんとせし著演透きま  
 呼禁せやや等目四郎短慮の功多し心鎮めて坐返れ性急の身を制  
 まれ目四郎僅かたつてさとの死ぬ中死なれどとの声口隠る感激の目と屢瞬一  
 誠の袖を露れて找難々平伏する著演頻り不歎息して又目四郎を呼進つ四下と  
 えあう声を潜せや目四郎も優う懺悔の趣現蕙蘭を折るものその身を  
 う芳しく又非慈と採るものその身をあつらう臭とのひげ古語中も似る善悪反覆  
 濁りまき清小従ふ汝が忠告賞志一那安同が邪智毒悪その奸計今ゆふ怕あふ  
 足るねども故馬を多の小六がうの他脇屋少将の死ありと哀うせけまを俺の知らざ  
 冤他則新田の餘類館大六英直が獨子とぞえし類ひ取て九今年親と做り  
 子とるる俺も知らぬ他が素生も多し汝も知らぬ是福の属る所那揚震が四知易  
 誠壁の耳ある世より遮莫汝が忠告のその甲斐なれば言一と口より出ての驕も追

小六が素生と安同の知られずの今ゆふ復され難美之終汝が管領家の上  
 一と許さるる安同歸府其告許七俺三族を滅さんと計ゆてきえんやとも亦時  
 ろ命をい辭す小六もるる小六を俱罪きて年来盡せし志の空花とるる  
 いかに其他則英直が獨子とるる俺身と共死すも時運と諦め思ひ絶え堪え  
 脇屋殿の死するを惜しむとの惜くも亦汝を用ひ死すはわいの  
 其所以焯のい起らぬ便其任小六を賺して伊勢の神戸へ落し遣はせ伊  
 勢の国司北畠左中将親能卿の父祖の時南帝の外戚なれば人望重なり南北兩朝を  
 和睦の後足利家の後を名と備泰と改め然れども南朝の聖恩今更よとる  
 人あわむは信れ小六が世と濟ぶも尤便宜の所小六も既武藝長と思慮の勇敢  
 ありとの尚十七の少年那身一箇と手放て落し遣はるる長旅宿宿を不便  
 ありれば汝も竊に謀隨ひて那地まで到て仕死すも不捷も義士と認め其甚だ這誼とる

元 乃る彼と胸の秘事うち諦ていし寧ろ説示目四郎を救ひてをいし易に御  
 用非如異国の盡処までも令郎の同伴七苦楽を分ち切ての報恩謝惠の首  
 途の目の定らる海を指揮願ふの事の中著者演領して今六は平塚の宿に退  
 居便と等小六といふを認めしと向を目四郎を車を不らん目四郎被と那藤白の密談  
 ともてこの小六も這里の内外張濟せられぬ容貌は声音さのとも認めし易に夜  
 中も恨めしとよ著者演又領して懐中鼻紙刺の思置代衣をち用にて有つは金三  
 両を取出し目四郎小與へて又示奉り汝且這金も七笠脚絆腰刀兩衣をも買敷て  
 旅装して小六を俟ね時日ひの暮下ゆきを又後不知る快々立れと急せ目四  
 郎の件の金を載せ收め後目と契正告別し平塚の旅舎を投て退りけり。

第十回 相摸川小六横死を示せ 遊行寺に著者演頓鈴と葬る

このころ 館小六も這朝例のごく疾起し奴婢之助の大学の句讀を授果し比養父著者演が  
 梅澤よりいさを運り来れければ遠く出迎て恙を祝し路の疲勞を尙慰め俱小  
 早飯を食けり著者演の客ありてそせり箸を置きて又舌関のうさ出たり小六も親生  
 平夫ありて慌しと訝りて来る客の誰らんと問ふのうさ出たりと問ふさま著者演は  
 書齋に退れり小六も胸のら騒がれて何とぞ鬱結し氣を合さんとありて徐に座  
 立出てひとり彼此と互に離れの縁頗の頭小用一鬼花の仕離色も真白なるまの  
 最盛りまければ且其処小鶴立む程小那密談の癖の趣目四郎が懺悔の忠告及著  
 演が答へ一言の首より尾まで圖らるる感果て或は堪えられぬ愛して竊に書齋へ退  
 つ獨執思ふや那目四郎をえん易許の癖者小窮奇構杭の取るより著者演は大人の徳  
 善く感悟と鳩毒毒遠て良茶のりしも至誠の致し所今も不ぬと著者演は大人の徳  
 有るれ然るも去歳の秋まに俺を知らりけり俺身の素生と目四郎を知らる



たれども世小浅き。あふ九年の光陰を麻之。親小仇を安同小告るる鬼神でも前知  
 去る死時節到来竟脱れぬ枉屈神の祟を今ゆいのせん遮莫俺身の故に大思  
 一養父母の罪多れんぞ知る自亦何処へ立退く然とて俱小手と束ねて討兵の  
 為小捕れて親子齊一死ん益々。所詮直の破れぬ先小那底倉多安同小旅鏡獨  
 入て塵小做まを録倉武士の京家小安同多俺が素生と知りさるのあること  
 けれ禍頓小消滅して養家小恙多る。然とて那奴の實父の雙足折を忍較果して  
 先考亞將の靈を慰めんと必決せり。亦時節到来の本意を  
 縁を嫌一ゆ。あふれぬの終也那安同を撃多る。所為多小知らる。この科  
 養家小及べ。俺所ゆるとて世の人小知らません。胸小同ひ吐小  
 答時移るを謀慮を凝らさ才子の憶断や登く小とあふ死計をゆり。夜  
 竊小起出て牆を踰敷を潜り相摸川の邊小赴た彼此と見。且と小頃首の聲小

月の中院のさされ。若葉小曇る遠山の迎梅雨小水倍と流れの特おの速り。又只這  
 方の岸邊。竹敷幾軒秋般赤立て。陸と水とも分が死。五六間伐放して野渡の船  
 場小あり。這頭へ總て人煙稀也。路津高師の孤屋あるを。櫓下も河原も  
 重二三十斤可る。葛石幾箇もあり。船俵人の立疲る。尻を掛る。小六を  
 其頭を得とる。腕く宿所か。舊所より潜入てその身の臥房小赴。程小遊  
 行寺の鐘音つゆを。響漏きとて。僕れ短夜が。尚四更なり。小六を憐て。枕小  
 就。甲夜より準備を。袂包を又庭へ。樹下。石燈籠の内に。何  
 燈籠の小障子。故の。小建。れを。知る。の。ま。り。り。看官。這。袂。包。の。内。中。多。何  
 等の東西。と尋る。小菊。一文字の短刀。と那系圖の巻軸。と金五十兩。小を。這。目  
 小六が。英直夫婦の正首小守と。俺身小授け。父の送金。小を。小六。二。百  
 兩。あ。る。今。より。後。俺。が。盤。纏。小。医。の。小。底。倉。を。戦。殺。小。那。揚。州。を

鶴小騎。十萬貫を腰にさし、亦何の事もなほ、  
 養父母を贈り、其の年来、親育の難費、  
 金の盤纏、要ると尋思、  
 紙の包、  
 朝生、  
 騒、  
 稲と疾視、  
 療治と請ひ、

まれば、  
 鍵、  
 劑と請れ、  
 病、  
 専要、  
 症、  
 液五貼、  
 と欲、  
 る名僧、  
 狂ひ、

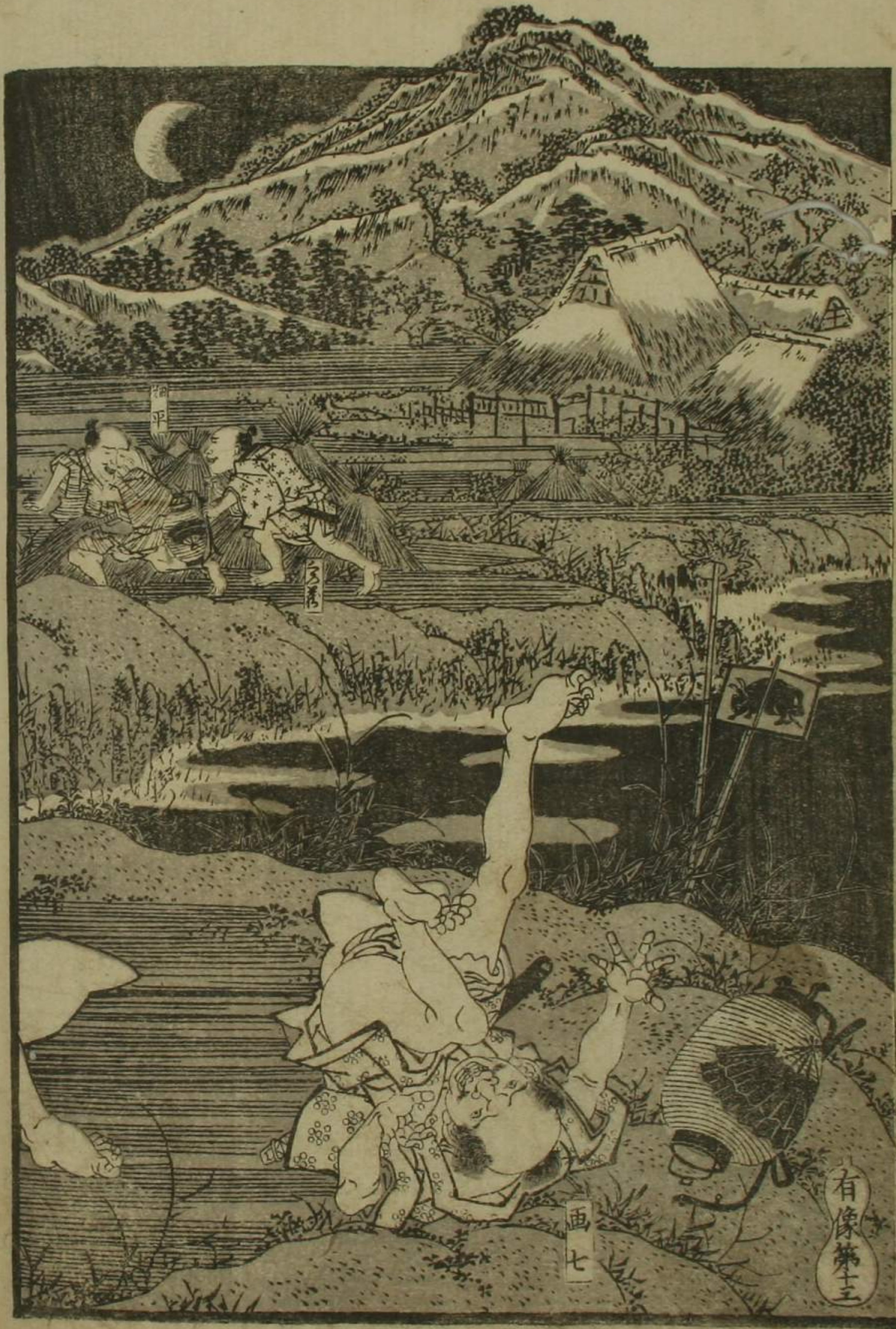
せくおち壓おち鎮おちめおちもおち幾番とよとをぞ。あおち故おち小おち著おち演おち日おち夜おち看おち病おちの人おち増おちとおちそのおち身おちも  
 務おちとおち廢おちきおち追おち回おちるおち時おち々おち看おちらおちけおちりおち左おち右おち考おち程おち小おちあおち五おち六おち日おちとおち経おちけおちれおち小おち六おちがおち狂おち乱おち  
 稍おち鎮おちりおち之おち飯おちとおち味おちとおち數おち枕おち不おち及おちりおち著おち演おち晚おち稻おちのおち為おち体おち小おち聊おち安おち堵おちのおち以おちとおち做おちしおちて  
 病おち苦おちのおち可おち不おちとおち決おちりおち小おち六おちとおち絶おちておち心おちとおちせおちまおちそおち終おち筆おちとおち投おち捨おちておち仰おち反おちておちあおち臥おち床おち高おち  
 軒おちとおち久おちくおち覺おちをおち徳おち而おち這おち日おちもおち暮おち小おち六おちとおちるおち熟おち睡おちしおちておち快おち氣おち小おちをおちそおち是おち則おち加  
 持おち祈おち禱おちのおち法おち驗おち小おちとおちあおちりおちのおちあおちんおちとおちておち二おち親おちのおち快おちひおちいおちらおちるおち看おち病おちのおち奴おち婢おち們おち相おち賀おちしおち悔  
 るおちとおちあおちわおちねおちもおちあおちのおち五おち六おち夜おちのおち程おちのおち睡おちるおちことおち泊おちりおち一おち日おち今おち宵おちのおち静おちかおちるおちれおちもおち更おちあおちく  
 隨おちふおちあおちむおちもおち及おち々おち睡おち眠おちとおち催おちしおちておち四おち睡おちのおち虎おち小おちわおちねおちもおち或おちのおち猫おち見おちとおち膝おち小おちのおち膝おち或おち昔おちと  
 うおちちおち合おちとおち寂おち然おちとおち目おち睡おちけおちりおち小おち六おちをおちれおちをおち不おち濟おちしおちておち竊おち小おち起おちきおち縁おち頼おちるおち戸おち尻おち成おち用おちき  
 庭おち小おち出おちるおち夜おち石おち燈おち籠おちのおち内おち小おち隠おち措おちけおちるおち袂おち包おちとおちちおちりおち出おちしおち腰おち小おち附おちけおち足おちとおちあおち後おち門おちに  
 赴おちりおちておち鎖おち探おちぬおちりおちておち蹴おち開おちておち西おちとおち投おちをおち走おちりおちけおち登おち時おち看おち病おちあおちりおちるおち奴おち婢おち們おち小おち六おちが

後おち門おちをおち蹴おち開おちくおち音おち小おち驚おち覺おちくおち臥おち籠おちとおちあおちりおち小おち六おちをおちもおち杖おちのおち脱おち出おちるおちあおちけおちりおち赴おちりおちておち駐おちま  
 上おちとおち罵おち騷おちくおち諸おち声おち小おち著おち演おちのおち晚おち稻おち奴おち婢おち之おち助おちもおち起おちておち走おちりおちとおち受おちておち看おち病おちのおち息おちをおち我  
 外おちにおち死おち暇おちとおちあおちるおちはおち周おち章おちとおち著おち演おち急おち小おち推おち鎮おちめおちておち益おち々おち穿おち鑿おち鑿おち時おちのおち移おちらおちんおち掩おちがおち門  
 前おちよりおち東おち西おちのおち岐おち路おち特おち小おち多おち少おち部おちとおち定おちめおちておち趕おち留おちめおち誰おち々おちのおち西おちのおち方おち又おち誰おち々おちのおち東おちのおち方  
 蕉おち火おち走おちるおち小おち便おちるおち食おち挑おち灯おちとおち推おちりおちとおちあおちるおちはおち快おちのおち言おち取おちもおち烈おちしおち主おち命おち不おち誰  
 うおち此おちのおち擬おち議おち走おち死おち美おちのおちぬおちとおち心おちもおち果おちだおちとおちあおちるおちはおち挑おち燈おちとおち片おち小おち引おち提おちきおち裳おち引おち折おちり  
 草おち鞋おちとおち穿おちるおち穿おちぬおちありおち十おち名おちあおちりおちのおち家おち僕おち們おち先おち僕おち小おち厮おち小おち至おちるおちまおち數おちとおち盡おちしおちておち後  
 門おちよりおち走おちりおち出おち路おちとおち分おちちおち喘おち々おちとおち趕おちさおちけおち然おち程おち小おちのおち夜おち女おち小おち六おちとおち故おち意おちとおち後おち門おちを  
 鼠おち倉おち小おち推おち開おちておち西おちとおち投おちておち走おちりおち既おち小おちとおち二おち里おちあおちりおち相おち模おち川おちのおち頭おち迄おち今おちのおちをおち二おち十おち町  
 なるおちのおちもおちあおちらおちずおちんおちとおちあおち折おちりおち忽おち地おち後おち方おち小おち人おち音おちとおち趕おち鬼おち走おちるおち兩おち個おちのおち若おち黨おち字おち六おち画  
 七おちとおち吸おち做おちるおち存おち一おち声おちあおちりおち立おちておちそおちをおち令おち郎おち不おちとおち言おちとおち留おちめおちとおち呼おちびおち呼おち掛おち透おちもおちあおちを



狂人 不狂 不狂人  
 還狂惑

十九  
 狂人 不狂 不狂人



有像 第十三

有像 第十三

画七

此處近看小六の信とるるて原東追人の道り。俺が九才の時不夢不寐の趣  
 似し。此處懲まきの倒れ足も黄緑のわんざん。真へ重要時停在て留んと近  
 つ字六の腕と右の小爪んで引肩被れ竹手と打と投さける。修煉の巻法不魂滅  
 依て苦と叫び声も怯まき進む画七と左小受て足と飛と礮と蹴る蹴られ  
 画七も云とろふ胸と反と倒れ。小六もこれをえめ。河原を投て走のゆ。影の  
 隈る夜中の月もええも讀ぬ一文不通の字六も膝まを掛て立まきまを猶痛む  
 ちの歌画の何曾々々不似る画七も夏山の腰と抜と野邊不歩態も両樹の坐  
 行松殿つゆも不令郎。あや喃々と呼被依声と嘖と拵れ。然程小館小六を又  
 只管不走る程。既りて相損川の頭も来まけれ。這路津場も尻掛石の重  
 三三十斤もある。死とも軽け不撥抱て岸小敷系不渡船小閃りと無て件の石と川  
 交と投捨て又引くと河原も竹敷密と走り入り程。所も身を潜め趕る人の

形迹を且く這里不規ひけ。浩処不字六画七の後れて来ぬ僮僕們。ち連立  
 趕菴多皆路津場不立て隈る。ける月影不。且も限り彼此。重要時眺  
 めて却の。俺們が投られ。那里も這里も不岐路とて。り。何処へもをいん  
 見よ渡船。這方の岸小敷系れ。儘あまれ。波濤と踏と流と。法は仙人もいん  
 走前画赴たぬん。不思議のものもあもの各と。いん。衆皆。さる。いん。ご。実  
 る。いん。の。いん。より。彼。屋。を。敲。起。て。路。津。高。師。不。答。さ。萬。一。知。り。あ  
 らん然と。軀と食共。伴。件。の。門。邊。不。立。より。連。り。不。門。と。ち。敲。て。喃。些。の。を。向  
 まう。ま。俺。們。の。狂。人。趕。菴。多。の。の。今。這。川。を。西。の。渡。草。の。の。あ。や。あ。ば。や  
 必。喃。を。呼。覚。さ。裏。面。一。声。不。と。答。て。頃。之。と。起。出。し。推。用。の。別。人。を。這  
 里。の。路。津。を。成。る。公。君。衆。人。を。左。見。右。を。各。々。向。て。ま。河。の。渡。さ。ぬ。地。方。の。法。度。を  
 犯。と。何。人。の。前。面。也。日。甘。登。て。も。自。今。ま。然。る。も。各。れ。の。同。れ。以。合。ま。り。あ。り。今

より此下先つる。俺門邊を慌しふ人の走る足音を。あるや。何程か何事ありん  
 水音の次とぞ。今後の異なるものあり。各々不趕れる。その狂人へあまき来て  
 身を投する。あゝ。この衆皆駭駭して。その大變あり。何れ何れ。身を投して流  
 沈まひけん。迹を。皆来て。下と罵る。字六画七画と共。小路津は高師さへ立出。水  
 際。不白なる月光。不挑燈を。照し。添て。その隈を。素衣に繫。船の内。庭草履は  
 足あり。只これの。おあ。船より。船底まで。濡り。水は。乾。這。光景。衆評。存一  
 此。這。船。中。身。を。跳。り。と。遣。れ。飛。走。水。の。中。を。走。り。庭。草。履。も。目。覚。め。り。  
 是。則。那。阿。人。の。庭。も。這。里。を。穿。り。と。来。て。脱。捨。られ。小。疑。ひ。を。さ。も。と。た。り。駭。悼。毛  
 只。り。も。多。く。會。憫。然。と。早。河。の。水。を。眺。て。鶴。立。む。程。著。演。を。小。六。が。る。の。心。の。を。限。り。も  
 存。れ。小。廝。小。挑。燈。点。さ。て。晚。縮。と。共。小。這。路。筋。の。長。花。吟。を。亭。環。の。三。條。を。尋。し。  
 来。り。河。原。小。評。議。と。凝。た。衆。人。を。足。て。声。高。多。く。そ。と。字。六。画。七。画。の。も。俺。只。願

小六が又の心か。懺りて。堪られ。居る。便り。を。俟。ん。と。出。て。見。え。と。思。ひ。ぬ。勢。死。の。事。を。  
 妹子も。俱。ま。と。の。暮。れ。め。て。出。も。人。を。遣。ざ。れ。月。明。夜。も。子。の。間。を。過。り。と。あ。ま。ま。と。来。  
 つる。事。と。い。へ。晚。縮。も。目。を。拭。ひ。て。や。や。字。六。上。画。七。画。の。も。小。六。の。遣。さ。れ。後。と。向。り。夫。婦。共  
 侶。を。走。り。と。近。着。ば。衆。人。も。皆。心。を。さ。り。左。右。別。れ。て。立。迎。へ。る。中。の。字。六。画。七。画。の。進。む  
 出。腰。を。折。め。て。家。公。曉。け。て。真。さ。る。も。と。と。違。々。来。り。し。れ。ば。苦。難。の。事。を。今。郎。の  
 この。水。屑。と。さ。る。を。の。ぬ。と。報。し。夫。婦。は。果。然。胸。を。潰。れ。声。あ。り。と。と。を。泣。き。の。り。  
 知ら。ん。放。ち。て。死。る。事。と。い。ふ。詳。小。告。し。の。事。と。辞。せ。り。向。む。る。字。六。画。七。画。の。頭。を。擡。り。  
 叱。り。の。の。路。次。の。始。末。を。知。る。事。の。故。を。俺。們。兩。名。の。ら。せ。り。儻。南。御。の。頭。を。令。  
 郎。は。趕。着。ま。り。と。推。留。ん。と。け。り。お。の。悍。然。と。夜。を。か。ど。擡。抗。を。引。着。て。右。と。左。二。間。の  
 方。を。拍。と。拍。と。投。め。り。此。彼。俱。小。腰。を。折。り。後。と。起。ん。と。せ。り。不。足。立。志。の。間。の。今。郎。は。這  
 方。を。投。て。直。走。り。ぬ。走。り。と。と。を。折。り。煙。草。畔。藏。們。の。後。走。り。來。り。し。れ。ば。報。苦

痛と忍びて共々趕菟なり。這河原を走らせしを不寂寞とて人影のあふむ因て這  
 路津成る公羽を連り不呼起して箇様々々々夜河の渡辰制度を前渡せし  
 人のるれ今より此下先の程佳々のありりと報れお胸うち騒がてゆく疑念の雲存  
 され這公羽相伴ふ海河原を彼此と索ねあはせしける果て公羽のいふ違ひは是  
 南せ船の内は今郎の脱捨を以て庭草履半佳又あり又船より船底まで濡れし居  
 是入水の時飛走水の掛りしを今郎の既水屑まきりありぬとわが決  
 めゆいと辞ひゆく真実しを報せしければ六日の甘蒲十日の甘菊さるる晚稲の  
 と声立て泣くを林の著者演が泣ぬ泣くは増て千萬の心衣を亦方方も  
 ありしを今郎の証跡分明るると汝等が推量の違ひはぬと然  
 とて空くとらち眺めざるある縦小六の病病よりて不覚不入水とありとも  
 その年来習ゆる涙水は波ののれ萬一の急流と凌ぎて前面渡せ候命らばと

ても亡散るに涉獨ら空の已れぬ。這方の山岸を竹藪のまはれ船の西の岸へ渡り  
 索のこゝろと敦圍と路津高師の推林めをとも宜まると多し。這早川の親姑山  
 這方小類ヨリ急流を以て森雨也水皮毎十倍と船尚自由遣かたり然  
 依りしを申さん佐々木梶原もとも隔渉をばあはぬ波よりそ推流さるる瞬  
 間十幾十里の流されぬ疑ひ多しと云は著者演だるそ介りとも後々も送恨るる為  
 此の這僮僕們の船に乗して前渡一案内にて索れ急流の舟賃は此の數つむ  
 俺の野上史と名告るは路津高師のゆふ又一議及ばる原來慈悲の字を藤澤の  
 大人での上ね這河原の遠く南御の地頭で云ふ中央賃のあつらんや食快乗せぬ  
 ねと云衆皆あるぬ。主人夫婦がねて来る小廝も俱に散動々と齊一船に乗る路  
 津高師の鏡と鮮々掉と操之辛くも前渡けし著演れを目送りて晚縮と共自身  
 邊る葛原尻を搦て那們還る事とて直の去る在りける程の晚縮も今宵看

病の奴婢們が由緒のいづれ復々を縁返を正木の甘根の絶て長髪別れをりて  
 人を恨みの悔吝愛惜喞言果一まろし著演禁め將大とそ又愚痴の詩言人知  
 ぶ小六を然角よりその心標泛々を才も器量も千萬人が立捷りこれこそ文學武藝  
 兩多その妙奥を極めよあひり多狂乱の劇疾を犯きて逝て返りぬ這河水自身を  
 淪めい前世の約束事でありけり。今を諦せ那英直真俺が年来の相識ある況  
 送小義を結びて俱小異姓の兄弟小なり所正英直の身よが不えきたる英直が臨  
 終のその妻母屋小箇様々といひ俺を頼ん為のその故小英直が俺小與り一書竹筒  
 一丁の字も寫され成素紙をありし事情を猜考小英直年来俺が并惡の趣を  
 傳せて世小憑くはとも素より俺と二面の交りなれば恁々といふよりこの故小只妻小  
 の箇様々といひ誘へて妻と子と俺小寄考小空緘る素紙をせし口必よくその  
 意を猜しと辭いで需不応と成義氣ありと知れよの故小俺も亦その假言と首六と

澤家小の機密を知り九ヶ年心盡なる意中の情義のけ一夜廿女比皆画餅  
 とろり憾の澤家が獨悔と歎く喞言小千萬倍の慷慨を限りもあわね死生の命  
 あり今ゆふ惜めども暨小那英直ハ新野の餘類脇屋の家臣より俺初より  
 小六を英直夫婦の手より是則その亡君義隆朝臣の死子の義をうけぬ  
 日まを俺もつぞ知ふより一の目花水橋よりおてまの目四郎と破落戸が懺悔小よ  
 不憶這実説とるる之那目四郎の九ヶ年前假名川の客店で英直が病中に母屋  
 藤白隼人正安同の箇様々をのりて年来俺と快ら心不力を磨ぐのるは那目四  
 郎が徳々の支あり時安同小件の機密を告とそ安同これ便りして小六をゆえ俺も  
 亦逆謀ありと説訴とそ宿怨を復さんと護ると既小急然とそ義の替で俺も  
 命と惜み素より野心をそと画景解とも免れぬとそをれぬのる小六を脇屋の公達



るの心とてつらふいとなく。英直母屋の孤忠節操感さるるもの。俺身を俱ふ非  
命は救さるる年来の博愛氣節の只這一事。虚名とて死にん。冥土黄泉に  
英直夫婦何と云へん。猝のいき起らぬ先。小六を他郷へ落し遣りしものなる。と  
告るふいさ。暇もあで入水の跡。たつて来。迷憾は言語の筆も。ぬれを盡せぬ。意  
悲歎。愛哀苦勞の心裏のうらみ。察しぬ。目の曇り。眞実深意。世小又  
類あり。情由と初とて。晩稲のいひけり。とて。お慰めさ。とて。皮川の氷と堰  
こぼり。涙の多。瀕りまをけ。身の重。愛ゆ。や。吳竹の敷。久し。驟ひ。小六と。思。親父母の  
密談。密意と。海。望て。且。救。馬。且。歎。心。い。ち。ら。ふ。事。俺。夫。人。の。俠。氣。義。節。即。人。の。及。び。ぬ  
所。也。今。の。う。れ。ぬ。事。空。城。多。素。紙。受。て。そ。の。意。不。博。る。事。素。より。知。己。の。あ。り。ち  
ま。く。俺。身。と。養。ひ。こ。も。の。忠。と。共。お。災。ひ。分。つ。の。い。れ。往。古。の。游。俠。義。士。も。類。單。され  
ら。の。う。れ。ぬ。姪。母。と。知。る。只。願。亡。夫。の。義。兄。弟。と。い。い。ふ。況。や。俺。は。け。ん。事。も。知。ら。う

絶て。つらふ。又。遺。つ。死。別。お。及。び。て。重。た。う。い。ふ。は。重。た。恩。と。情。の。縁。由。と。外。か。が。聞。く。這  
身の薄命。実の親も。異なりぬ。九十年。以来。親育の親。一。日。も。考。行。ら。く。仕。へ。ぬ  
せ。で。詭。り。の。横。死。と。示。す。親。と。養。父。の。仇。を。殺。して。那。禍。鬼。と。ち。禳。ん。と。思。ひ。允。さ。せ。ぬ。い。へ  
い。え。ぬ。ぞ。苦。し。死。留。め。ぬ。と。思。ふ。う。れ。口。説。法。堂。合。と。伏。拝。め。ぬ。影。の。隠。し。そ。叢  
竹。の。敏。系。下。の。拍。以。届。ぬ。節。も。短。夜。の。そ。の。曉。と。思。ふ。も。感。涙。の。外。多。り。け。り。浩。然。小。字  
六。画。七。の。衆。人。と。共。侶。お。又。船。お。ち。衆。り。て。這。方。の。河。原。も。還。り。来。り。却。著。演。お。報。る。事。  
仰。付。ら。れ。ら。う。前。面。渡。と。部。と。定。り。陸。も。水。も。涉。獵。せ。ぬ。今。郎。の。亡。骸。も。生。骸。も  
え。ぬ。い。さ。と。又。路。津。高。師。著。演。晚。稻。お。ち。對。して。衛。中。も。既。お。せ。し。如。く。毎。日。水。は。高。け  
れ。石。も。流。れ。早。河。も。身。を。投。入。の。亡。骸。を。索。ひ。ぬ。事。且。そ。還。さ。せ。ぬ。い。さ。と。本。意  
る。野。上。吏。婦。の。嘆。息。も。勞。ふ。事。な。ら。ぬ。と。身。を。起。せ。り。明。き。も。横。雲。の。間。も。苦  
む。杜。鵲。冥。土。の。鳥。と。思。ふ。こ。も。見。ん。頼。む。死。天。の。旅。ある。殘。の。月。影。も。共。お。流。る。河。水。の。寒。時



夜半舟行

北

有像第十四

像贊六套有像一十四頁  
 贊詠廿首作者所自題也



河水の流れてかへらぬれぬも  
 ふさのあひのさてもうたふも  
**夫妻趕到夜回津**  
 あふれとあつたをさへて

夜半舟行

有像第十四

有像第十四

有像第十四

廻向の弥陀唱名親の誓ひと子の數あるに知れぬ具竹の世の憂ふを以ては此  
 べ形なき夢路と述ふ心地と覺成迷ひの夢なる涙の深し雨袖の未だ奪へ紫花  
 後藤澤の宿所と投て衆人を俱と徐の還るけり初程に著演のその次の目も  
 人を相摸川の頭へ遣へ小六が亡骸とまゝの便宜もさうしう純然に絶れ  
 とも里人們の亡骸を索得さうと以知と小六が渡船を脱捨る羊隻の庭草履をさ  
 依の極を斂めて其菩提達磨の示寂の後棺内は羊隻履の外はなほ死との故事  
 ありものも不樂いゆべ。徳而著演の小六が亡骸を夜より第五の黄昏の空棺  
 擡かまて遊行寺へ送り遣せ程の藤澤南御の里人のうち五里四方の遠村  
 落のゆきも信へ空話續いて吊送せしるもさうりも然も廣に遊行寺の本堂の中  
 客殿の中所改まて取合合三十三餘名と記ける這見の施主の野上奴婢之助と五六個の  
 所親の導師并大衆へ布施するも英重母屋を安葬しし時より一人心を用ひ

法を遂げて丁重に三演の那日より則嫡子の忌服を受けて喪の籠りたる程に心  
 小六の不慮な世に去りたるも安同の存飽さして鎌倉の還るの後たゞ謀  
 訴と俺と亡えとを謀らるる邊は小六が在るさうと怖る足も縁も備檢  
 宅をせられ折の目四郎と夢さう。脇屋の家譜と文字の短刀を他へたれ  
 絆むがうくさるる奥より隠さぬと尋思さう。妻も告げを只ひとり小六が子舎  
 終て彼此と撥擲ふ然る東西絶てさうしう疑訝と鍵をたゞ衣箱をひた  
 内中から衣を出てさうさう母屋が像見の衣を那誰に這某へ小六が忠  
 紙牌を附るあり登時著演さう。是等の衣の小六が母の服圖の折紀念を  
 奴婢們の取り返せんと豫より信擇做と措けり。痛すぬその服圖のあふす  
 とさう夢の跡筆の蹟と母の子の數を述は紀念を今空をさうしう  
 あるべ死ふ忘れぬ愛惜の迷ひと胸の弱るさうと焚くさう。彼と取あてられ

不<sup>レ</sup>ど、<sup>○</sup>字紙小包<sup>○</sup>三<sup>○</sup>金<sup>○</sup>三<sup>○</sup>ありて<sup>○</sup>金子<sup>○</sup>一百五十兩家尊家母刀自と記<sup>○</sup>す<sup>○</sup>評<sup>○</sup>り<sup>○</sup>封<sup>○</sup>す<sup>○</sup>  
 折<sup>○</sup>て<sup>○</sup>傳<sup>○</sup>へ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>小<sup>○</sup>敷<sup>○</sup>中<sup>○</sup>違<sup>○</sup>ひ<sup>○</sup>を<sup>○</sup>什<sup>○</sup>麼<sup>○</sup>の<sup>○</sup>事<sup>○</sup>と<sup>○</sup>這<sup>○</sup>金<sup>○</sup>を<sup>○</sup>小<sup>○</sup>六<sup>○</sup>を<sup>○</sup>藏<sup>○</sup>置<sup>○</sup>す<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>と<sup>○</sup>疑<sup>○</sup>ふ<sup>○</sup>の<sup>○</sup>事<sup>○</sup>と<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>  
 ら<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>と<sup>○</sup>思<sup>○</sup>惟<sup>○</sup>ふ<sup>○</sup>の<sup>○</sup>事<sup>○</sup>と<sup>○</sup>英<sup>○</sup>直<sup>○</sup>の<sup>○</sup>送<sup>○</sup>金<sup>○</sup>を<sup>○</sup>艱<sup>○</sup>苦<sup>○</sup>の<sup>○</sup>中<sup>○</sup>用<sup>○</sup>ひ<sup>○</sup>も<sup>○</sup>減<sup>○</sup>さ<sup>○</sup>し<sup>○</sup>只<sup>○</sup>幼<sup>○</sup>君<sup>○</sup>を<sup>○</sup>奉<sup>○</sup>  
 と<sup>○</sup>て<sup>○</sup>の<sup>○</sup>妻<sup>○</sup>母<sup>○</sup>屋<sup>○</sup>を<sup>○</sup>逸<sup>○</sup>と<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>後<sup>○</sup>母<sup>○</sup>屋<sup>○</sup>も<sup>○</sup>年<sup>○</sup>來<sup>○</sup>秘<sup>○</sup>惜<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>身<sup>○</sup>後<sup>○</sup>小<sup>○</sup>六<sup>○</sup>を<sup>○</sup>奉<sup>○</sup>と<sup>○</sup>し<sup>○</sup>と<sup>○</sup>傳<sup>○</sup>へ<sup>○</sup>り<sup>○</sup>  
 亡<sup>○</sup>母<sup>○</sup>親<sup>○</sup>の<sup>○</sup>紀<sup>○</sup>念<sup>○</sup>と<sup>○</sup>て<sup>○</sup>贈<sup>○</sup>と<sup>○</sup>記<sup>○</sup>め<sup>○</sup>け<sup>○</sup>は<sup>○</sup>是<sup>○</sup>を<sup>○</sup>以<sup>○</sup>て<sup>○</sup>彼<sup>○</sup>を<sup>○</sup>以<sup>○</sup>て<sup>○</sup>忠<sup>○</sup>臣<sup>○</sup>義<sup>○</sup>子<sup>○</sup>の<sup>○</sup>用<sup>○</sup>意<sup>○</sup>に<sup>○</sup>  
 格<sup>○</sup>別<sup>○</sup>英<sup>○</sup>直<sup>○</sup>母<sup>○</sup>屋<sup>○</sup>を<sup>○</sup>幼<sup>○</sup>君<sup>○</sup>の<sup>○</sup>為<sup>○</sup>と<sup>○</sup>し<sup>○</sup>用<sup>○</sup>を<sup>○</sup>小<sup>○</sup>六<sup>○</sup>を<sup>○</sup>恩<sup>○</sup>と<sup>○</sup>義<sup>○</sup>の<sup>○</sup>為<sup>○</sup>と<sup>○</sup>し<sup>○</sup>這<sup>○</sup>金<sup>○</sup>を<sup>○</sup>  
 み<sup>○</sup>づ<sup>○</sup>う<sup>○</sup>用<sup>○</sup>を<sup>○</sup>前<sup>○</sup>後<sup>○</sup>兩<sup>○</sup>度<sup>○</sup>の<sup>○</sup>安<sup>○</sup>葬<sup>○</sup>と<sup>○</sup>并<sup>○</sup>に<sup>○</sup>の<sup>○</sup>身<sup>○</sup>を<sup>○</sup>養<sup>○</sup>育<sup>○</sup>の<sup>○</sup>恩<sup>○</sup>に<sup>○</sup>答<sup>○</sup>る<sup>○</sup>紀<sup>○</sup>念<sup>○</sup>金<sup>○</sup>を<sup>○</sup>  
 その<sup>○</sup>身<sup>○</sup>の<sup>○</sup>要<sup>○</sup>る<sup>○</sup>た<sup>○</sup>東<sup>○</sup>西<sup>○</sup>と<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>を<sup>○</sup>豫<sup>○</sup>より<sup>○</sup>覺<sup>○</sup>期<sup>○</sup>の<sup>○</sup>所<sup>○</sup>為<sup>○</sup>に<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>む<sup>○</sup>と<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>と<sup>○</sup>蛇<sup>○</sup>が<sup>○</sup>知<sup>○</sup>を<sup>○</sup>  
 寫<sup>○</sup>送<sup>○</sup>一<sup>○</sup>けん<sup>○</sup>十三<sup>○</sup>言<sup>○</sup>の<sup>○</sup>送<sup>○</sup>墨<sup>○</sup>の<sup>○</sup>寸<sup>○</sup>璧<sup>○</sup>年<sup>○</sup>の<sup>○</sup>總<sup>○</sup>ふ<sup>○</sup>十七<sup>○</sup>歳<sup>○</sup>の<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>も<sup>○</sup>夏<sup>○</sup>毛<sup>○</sup>と<sup>○</sup>一<sup>○</sup>期<sup>○</sup>と<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>  
 筆<sup>○</sup>の<sup>○</sup>命<sup>○</sup>毛<sup>○</sup>短<sup>○</sup>き<sup>○</sup>鳴<sup>○</sup>平<sup>○</sup>義<sup>○</sup>を<sup>○</sup>哉<sup>○</sup>小<sup>○</sup>六<sup>○</sup>が<sup>○</sup>用<sup>○</sup>心<sup>○</sup>噫<sup>○</sup>嘻<sup>○</sup>忠<sup>○</sup>を<sup>○</sup>哉<sup>○</sup>館<sup>○</sup>氏<sup>○</sup>夫<sup>○</sup>事<sup>○</sup>言<sup>○</sup>は<sup>○</sup>主<sup>○</sup>従<sup>○</sup>  
 一<sup>○</sup>對<sup>○</sup>の<sup>○</sup>賢<sup>○</sup>才<sup>○</sup>英<sup>○</sup>智<sup>○</sup>の<sup>○</sup>幸<sup>○</sup>を<sup>○</sup>天<sup>○</sup>平<sup>○</sup>命<sup>○</sup>平<sup>○</sup>造<sup>○</sup>物<sup>○</sup>者<sup>○</sup>の<sup>○</sup>惜<sup>○</sup>て<sup>○</sup>年<sup>○</sup>と<sup>○</sup>本<sup>○</sup>尊<sup>○</sup>以<sup>○</sup>て<sup>○</sup>後<sup>○</sup>任<sup>○</sup>を<sup>○</sup>取<sup>○</sup>り<sup>○</sup>て<sup>○</sup>死<sup>○</sup>

喪<sup>○</sup>の<sup>○</sup>憾<sup>○</sup>哀<sup>○</sup>たる<sup>○</sup>と<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>物<sup>○</sup>を<sup>○</sup>音<sup>○</sup>を<sup>○</sup>と<sup>○</sup>る<sup>○</sup>夜<sup>○</sup>鶴<sup>○</sup>の<sup>○</sup>子<sup>○</sup>を<sup>○</sup>親<sup>○</sup>の<sup>○</sup>堪<sup>○</sup>ぬ<sup>○</sup>歎<sup>○</sup>たる<sup>○</sup>事<sup>○</sup>と<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>  
 思<sup>○</sup>ひ<sup>○</sup>久<sup>○</sup>し<sup>○</sup>う<sup>○</sup>眼<sup>○</sup>包<sup>○</sup>を<sup>○</sup>拂<sup>○</sup>か<sup>○</sup>て<sup>○</sup>金<sup>○</sup>を<sup>○</sup>包<sup>○</sup>と<sup>○</sup>一<sup>○</sup>枚<sup>○</sup>の<sup>○</sup>字<sup>○</sup>紙<sup>○</sup>を<sup>○</sup>徐<sup>○</sup>に<sup>○</sup>引<sup>○</sup>伸<sup>○</sup>と<sup>○</sup>し<sup>○</sup>は<sup>○</sup>亦<sup>○</sup>小<sup>○</sup>六<sup>○</sup>が<sup>○</sup>筆<sup>○</sup>を<sup>○</sup>  
 口<sup>○</sup>を<sup>○</sup>習<sup>○</sup>の<sup>○</sup>や<sup>○</sup>ふ<sup>○</sup>と<sup>○</sup>し<sup>○</sup>は<sup>○</sup>亦<sup>○</sup>小<sup>○</sup>六<sup>○</sup>が<sup>○</sup>筆<sup>○</sup>を<sup>○</sup>  
 寫<sup>○</sup>一<sup>○</sup>を<sup>○</sup>寫<sup>○</sup>お<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>の<sup>○</sup>ゆ<sup>○</sup>に<sup>○</sup>不<sup>○</sup>意<sup>○</sup>中<sup>○</sup>の<sup>○</sup>吟<sup>○</sup>と<sup>○</sup>し<sup>○</sup>は<sup>○</sup>則<sup>○</sup>折<sup>○</sup>句<sup>○</sup>を<sup>○</sup>五<sup>○</sup>七<sup>○</sup>五<sup>○</sup>七<sup>○</sup>の<sup>○</sup>句<sup>○</sup>の<sup>○</sup>上<sup>○</sup>下<sup>○</sup>の<sup>○</sup>  
 感<sup>○</sup>を<sup>○</sup>と<sup>○</sup>半<sup>○</sup>响<sup>○</sup>と<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>と<sup>○</sup>願<sup>○</sup>ふ<sup>○</sup>加<sup>○</sup>えて<sup>○</sup>然<sup>○</sup>小<sup>○</sup>六<sup>○</sup>を<sup>○</sup>名<sup>○</sup>將<sup>○</sup>の<sup>○</sup>子<sup>○</sup>孫<sup>○</sup>と<sup>○</sup>し<sup>○</sup>は<sup>○</sup>俺<sup>○</sup>が<sup>○</sup>類<sup>○</sup>嗣<sup>○</sup>と<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>  
 世<sup>○</sup>に<sup>○</sup>不<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>ば<sup>○</sup>竊<sup>○</sup>の<sup>○</sup>蓋<sup>○</sup>て<sup>○</sup>這<sup>○</sup>筆<sup>○</sup>遊<sup>○</sup>め<sup>○</sup>及<sup>○</sup>ぶ<sup>○</sup>と<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>那<sup>○</sup>昌<sup>○</sup>四<sup>○</sup>郎<sup>○</sup>が<sup>○</sup>ひ<sup>○</sup>つ<sup>○</sup>と<sup>○</sup>是<sup>○</sup>を<sup>○</sup>疑<sup>○</sup>ふ<sup>○</sup>事<sup>○</sup>と<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>  
 この<sup>○</sup>こ<sup>○</sup>ろ<sup>○</sup>に<sup>○</sup>小<sup>○</sup>六<sup>○</sup>が<sup>○</sup>草<sup>○</sup>の<sup>○</sup>名<sup>○</sup>と<sup>○</sup>助<sup>○</sup>則<sup>○</sup>と<sup>○</sup>寫<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>の<sup>○</sup>通<sup>○</sup>祖<sup>○</sup>義<sup>○</sup>助<sup>○</sup>の<sup>○</sup>諱<sup>○</sup>の<sup>○</sup>一<sup>○</sup>字<sup>○</sup>を<sup>○</sup>取<sup>○</sup>る<sup>○</sup>事<sup>○</sup>と<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>  
 必<sup>○</sup>願<sup>○</sup>髪<sup>○</sup>を<sup>○</sup>剃<sup>○</sup>て<sup>○</sup>佳<sup>○</sup>字<sup>○</sup>と<sup>○</sup>し<sup>○</sup>は<sup>○</sup>彼<sup>○</sup>と<sup>○</sup>撰<sup>○</sup>る<sup>○</sup>名<sup>○</sup>を<sup>○</sup>花<sup>○</sup>押<sup>○</sup>と<sup>○</sup>し<sup>○</sup>は<sup>○</sup>定<sup>○</sup>治<sup>○</sup>と<sup>○</sup>し<sup>○</sup>は<sup>○</sup>初<sup>○</sup>秋<sup>○</sup>  
 ま<sup>○</sup>の<sup>○</sup>母<sup>○</sup>親<sup>○</sup>の<sup>○</sup>服<sup>○</sup>中<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>黙<sup>○</sup>止<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>の<sup>○</sup>地<sup>○</sup>を<sup>○</sup>撰<sup>○</sup>る<sup>○</sup>名<sup>○</sup>を<sup>○</sup>撰<sup>○</sup>る<sup>○</sup>事<sup>○</sup>と<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>  
 懐<sup>○</sup>ふ<sup>○</sup>事<sup>○</sup>と<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>名<sup>○</sup>を<sup>○</sup>送<sup>○</sup>と<sup>○</sup>返<sup>○</sup>す<sup>○</sup>人<sup>○</sup>を<sup>○</sup>何<sup>○</sup>と<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>紀<sup>○</sup>念<sup>○</sup>の<sup>○</sup>金<sup>○</sup>を<sup>○</sup>憾<sup>○</sup>る<sup>○</sup>事<sup>○</sup>と<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>

息の声の洩はぬ板戸の板厨をぞ又推開て衣の金三其の随衣箱の敵を  
 ら不隈もろく又那家譜の巻軸と短刀を索す似る東西のふりくつる疑念  
 跡増と那目四郎が任々とのひつる虚談然らざる見たる夢徳物或は母屋は  
 をより人おそれるを恐れ遠く山石室をふ秘措たるあつる物あつるを  
 絆向んもまきければ冬山の山杉木を推はる花を求め夏の池の水を掬て氷の厚を搦ふ  
 似るもの益々と喰はて却晚縮のほの箇様々とは是等の絆の趣も具も耳は示せ  
 ぬが晚縮のつらうち歎た連り袖を濡る事情もま知る奴婢之助をさるも  
 まま小六がまきつて樹影々と七葉を過りるものひかく親を泣く泣かせ童  
 蒙心もあるまきなり然程小六助則に相横川原の竹藪に陰の晝を懸て夜の  
 出く窓のびくともちひとあつる探歩くと五六夕ふ及ぶ程の暮有演の小六が亡骸を索  
 得るといふ做と遊行寺へ安葬するその絆の為体巷談街説異同を既に正

ふふ心安と思ひて竊に相摸川を渡りて小田原の里に赴くは  
 宿所を狂ひ出ふその折の尻を臥被ひとちを差有るのを反討の準備あるを  
 朝市らて骨董店を故衣を賣んと彼此と涉獵る程尚巳時可る口草威の  
 身甲と薄鏢の甲手膺着と長三尺二寸多大刀さへ一口ありければ請取て扱くるを  
 銘もれも百も肩を寒く焼刃の勾微妙しと露を合朝の櫻の真盛るを異るを  
 敷ふ赴たて心考ふ身を固めは打粉はそと想像るべし菊文字の短刀は件は大刀を  
 佩添て那巻軸の袂に包く腰に結着その曬氏目より潜る底倉を扱ての程は  
 樹下暗は麓路の春の方人あつてや野上の令郎等せめと叫びけり此は是甚  
 摩多人ぞ其を編み續か巻を易て第二集の筒端小解分ると聴絲か

開卷驚奇俠客傳第一集卷之五終





本草綱目卷之...

本草綱目卷之...

何内星共衛

大对心齋蘇葫劑也

丁子星平共衛

丁子星平共衛

天引三羊壬辰五月吉日申發

古今圖書集成... 四十八文 ○黑... 美... 香... 丸

陳藥本家... 丸

歌入... 丸

誦... 丸

宗... 丸

